移動する生からみる日本の教育・就労(2)

一ブラジルにかえる人びとの「環境」についてのかたりより一

福岡教育大学 ハヤシザキカズヒコ

1. 目的

本報告の目的は、日本でそだちながらブラジルに帰国した人びとの、ブラジルでの再適応にかかわる「環境」についてのかたりをもとに、かれらがなぜブラジルにとどまるのかの「環境」的要因、を考察することにある。さらに、その考察をつうじて、日本社会での移民のうけいれ、統合にかかわる諸問題を照射し、教育・社会のありかたへの議論を喚起したいとおもう。

2. 方法

2013 年より現在まで、継続的におこなっている日本とブラジルにおけるインタビュー調査でえた データを手がかりとする。インタビューの対象は、1) 日本での滞在経験や被教育経験をもちながら、 ブラジルに帰国し、ブラジルで生活している人びと、および、2) ブラジルで日本がえりの人びとを 雇用する企業、学校関係者、人材派遣業者等である。

3. 結果

ブラジルではいわゆる「敗者復活」をはたしているものがすくなくなかった。その背景には、トラ ンスマイグラント性としての文化資本、逆境につよいレジリエンス、日系企業の進出、交友的環境の ちがいなどがある。第一に、日本での生活経験をいかしているものがおおいということがいえる。事 例としては、日系企業での中間的役割をはたすもの、トリリンガルをいかした旅行業の開業、和食業 の開業をみることができる。そして第二に、社会へと参画しやすいブラジルの環境がある。1) 就労 についていえば、労働条件についての厳格な法律がかれらのニーズをみたしている例がおおい。2) さらに柔軟な教育制度がある。高校卒業資格試験・通信教育・成人教育の充実や、夜間大学がおおい。 残業が制限されるために夜間の学校にかよえるという条件もある。3) つぎに、日系のネットワーク を活用できることがあげられる。たとえば日系人に特化した人材派遣団体があり、日系団体もある。 日系企業の進出もこれにはいる。4) 人間関係がラクだというかたりがおおい。ブラジル人はあかる く、やさしい。日本とちがって学校や職場でも孤立しにくいといわれる。それに関連して、5)非年 齢主義がある。友人関係はもちろん、学校でも職場でも、これは孤立や疎外感を緩和する役割をはた す。6) そうした状況において、不十分だった言語能力を発達させる人びとがいる。通訳業務をつう じて日本語やポルトガル語の高度で専門的な能力を獲得する人びとがそれにあたる。就労しながら大 学で学位をとることもめずらしくはない。他方で日本へもどる動機としては、もっとも言及されるの が賃金、ほか治安、食文化、行政の効率などがかたられた。

4. 結論

かれらは生活の利便性と人間らしい人生とを天秤にかけたうえで、ブラジルでの滞在をつづけている。移民のうけいれという観点からすれば、かれらのような移動する人びとが、日本においても生活しやすくなるためには社会や制度がどうあるべきなのか。統合の問題点については、これまでも「日本人になる」ための画一的な教育・支援に懐疑的な目がむけられてきた。また就労についても移民ー日本人間の格差や移民への不平等なあつかいは統合の弊害とされてきた。しかし移民の統合やうけいれがすすまないとすれば、日本的な教育・社会それ自体の弊害もおおきな要因であるようにみえる。